「授業備品」N05 H.27.7.7「アクティブ・ラーニング(覚えるから考える授業へ)」

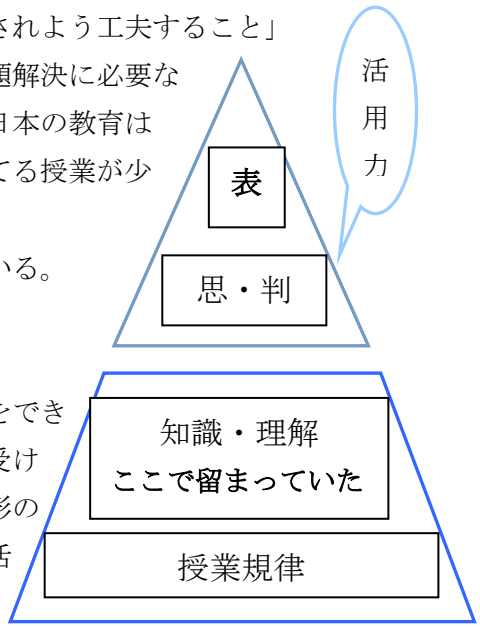
学習指導要領総則第４の２の(2)

「各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されよう工夫すること」

総則のこの文から「学力」の要素は、①基礎的・基的な知識・技能、②課題解決に必要な思考力・判断力・表現力、③主体的な学習態度の三つとされてきた。だが、日本の教育は①の知識の習得が中心で、②や③の応用する力や生活に役立てる実践力を育てる授業が少なかった。教師主導型・答えを誘導する型の授業だ。

・子供は教師の話を一方的に聞き、板書をノートに書くことが中心となっている。
・テストでは、覚えた知識を早く正確に出せるかを重視している。
・読み書き計算の知識が重要であるとし、スキル重視型の授業が多い。

右記の台形に当たる部分がそれに当たる。教師が子供に知識を教え、それをできるだけ早く再生することを試験で求める構図が続いてきたのは、教師自身が受けてきた授業を再現する傾向があるからだ。生きていくためには、右記の三角形の知識を基に思考・判断し、表現する力が必要だ。音声言語、文字言語の言語活動が手段となる。普段の授業で培わなければならない。



アクティブ・ラーニング

変わらない授業を変えるために中央教育審議会でもアクティブ・ラーニングの議論が始まった。子供たちが学習課題を受け止め、考え、仲間と伝え合い、まとめ、定着問題にチャレンジし、学習を振り返る等の学習過程の授業だ。次の学習指導要領が示す「主体的・協働的な授業」である。教師は、これまで「何を教えるか」に加えて「学び方を身に付けさせる教育」を重視していかなければならない。具体的には、課題解決学習、問題解決学習等である。

アクティブ・ラーニングにはさまざまな手法があり決まった型はない。必要に応じて取り入ればよい。知識・技能の習得の場面では従来の一斉指導型が有効な場合もある。習得した知識を定着するために子供たちが仲間で学びあう活動も有効である。

〇教科横断的な学び

アクティブ・ラーニングの中心は、、どの教科でも共通した学び方や学習過程を取り入れる授業である。これまでの教師一人ひとりが違う授業を共通した①問題解決的な学習活動　②見通しや振り返りをする学習活動③言語活動等を教科横断的に行うことだ。学習過程(問題解決学習過程)を統一することが中心となる。なお、アクティブ・ラーニングの協働的な学習では音声言語を使うことが主となるが、文字言語も大切にすることも重要である。話し合いをすることに加えてしっかり書いて表す。これをバランスよく教科横断的に行うことが大切だ。

〇教師は「待つ」姿勢

教師は、課題の設定までは教師中心に授業を展開してもよいが、その後の学習過程は、できるだけ子供たちに任せることが重要だ。ペアや班学習、全体の練り上げ等で手を出さないようにするとよい。とりわけグループ学習は、待つ姿勢を貫くことだ。我慢、我慢を心掛けたい。それには、教師は授業の１単位時間で３割以内しか話さないことを目標にするとよい。教師の話す言葉を減らすために、できるだけ言葉を選りすぐり、必要最低限の言葉しか発しないように心掛けたい。話す言葉を３割以内にすれば、やがて２割が見えてくる。そのためには、子供が学習過程が変わることを知らせたり、一斉学習での子供たちが司会・進行を行う方法、相互指名、学習グッズを板書する方法等が考えられる。それには、普段から教師が教科内容を「どう教えるか」に加えて、子供たちが自ら答え導き、表現し、興味を広げ、深く考えるような授業を行うようにするとよい。

○　ＡＬを進めるための授業自己評価 20

教師の多弁は、これまでの「覚える授業」でも避けたい授業であった。授業改革がアクティブ・ラーニングに向かう今日、「考える授業」を子供と教師が意識しなければならない。下記に記載している課題を一つでも減らし、次期学習指導要領が目指す主体的・協同的な学習の授業を行うとよい。まず、下記の内容を自らの授業で振り返ることが重要だ。＊解決方法については、次号から紹介をする。

Ⅰ　学習意欲を高める課題の工夫(見通し)（課題の提示・問いをもつ・問いの共有)

1　教師が自ら課題を設定している
2　本時の課題が目標の標記だけに終わっている
3　説明が長く課題提示に時間がかかっている
4　子供に解くための見通しをもたせず教師が解き方の方向性を示してしまっている
5　大まかな見通し(解答）を全員にもたせていない

Ⅱ　話し合いが深まる学び合い(言語活動・交流活動)（自力解決・集団解決（ペア・班・全体))

6　自力解決の時間が短い
7　ペア・グループ学習等を取り入れていない
8　ペア・班学習の進め方を指導していない
9　集団解決を一問一答で進めている
10　肝心な場面がスモールステップとなっている
11　教師が司会者(繋ぎ役）になりすぎている
12　教師の用意した「正解」を当てるような授業になっている
13　発表の羅列で終わらせる話し合いにしている
14　考察がない
15　形だけの会話「わかりましたか」「いいです」で終わらせている

Ⅲ　学んだことが実感できる振り返り(振り返り)（まとめ・振り返り)

16　まとめを教師がしている
17　振り帰りの時間がない
18　教師が多弁となっている
19　タイムマネジメントができていない
20　教えることと引き出すことの区別をつけていない

○他県の授業改善の視点

全教科で下記の視点で常に授業評価をしている自治体の例。

【より豊かな問題解決型学習のための 10 か条】　－牧田英昭･秋田喜代美著「教える空間から学び合う場へ」―

1　教師の声のトーンが上がりすぎていないか？
2　教師が話し過ぎていないか？
3　話を繰り返していないか？
4　子どもの実際より先走っていないか？
5　学習課題のレベルが下がっていないか？
6　肝心な場面でスモールステップになっていないか？
7　教師の準備した「正解」を当てるような授業になっていないか？
8　生徒が時間をかけて創り出したものを無駄にしていないか？
9　結局はテストの点数だけを重視していないか？
10「この単元（授業）でどんな成長をさせたいか」というビジョンが明確か？